

に、アイスブレイキングとして「船長の決断」を課題としたコミュニケーションゲームを行った。ついで、研修目標 GIO, SBOs・研修方略 LS・研修評価 EV をワンユニットとしたカリキュラムプランニングの作業に入った。各班のユニット名はAグループが単純窩洞の形成と修復操作, Bグループが歯周初期治療, Cグループが抜歯そしてDグループが全部鑄造冠による歯冠修復処置とした。

2日目の後半には、前日のKJ法により抽出した複数の問題点から、2次元、3次元展開法によって決定した最優先で協議すべき問題点についての対応策の作製作業を行った。

ワークショップの内容については、詳細な記録を公表しているので、今回はワークショップの評価として受講者の Faculty Development の効果についてのアンケート結果について報告する。

各セッションにおける修得度を受講者が自己評価した結果、いずれの項目も“理解はできたが応用は不十分である”との回答が6~7割であった。しかし十分に理解できなかった項目としては、“研修方略”と複数の問題点から優先度の高いものを選択する方法である3次元展開法における“改善への抵抗の克服”が挙げられた。

受講者が非常に興味を持った項目については、“KJ法”と“GIOとSBOsの区別”が最多の8名で、これは先に示した修得度が比較的高い項目であった。一方、最小は“評価方法とその特性”が“教育目標分類”がそれぞれ1および2名であった。この2項目は、まず教育目標分類の3領域が区別できないと適切な評価方法の選択が困難となる為ではないかと思われた。

本ワークショップの内容についての評価は、総論的に内容はかなり価値があるが、やや難しく、このような形式の教育方法はある程度~かなり効果があり、本人の興味にある程度合致していたとの回答が得られたが、時間についてはやや多いとやや少ないがそれぞれ30数%を占めた。これは受講者のモチベーションの相違が表れたものと考えられる。なお、1名の受講者は内容を全く評価しないと、本人の興味とは全く合致していなかったという非常に残念な回答をしている。

ワークショップで得た成果に関連して今後1年間で実施したいと考えている内容では、カリキュラムの作製が最も多く、次に評価シートの作製が続いた。その他、スタッフにフィードバックを行いたいとの意見もあった。

以上より、第3回ワークショップを2日間終えて参加者の評価は、カリキュラムの内容が多いという意見があったものの、ワークショップを開催することに對

し、参加者のほぼ全員が賛成しており、指導医の資質、指導力のさらなる向上を目的としたワークショップを開催することの重要性が示唆された。

座長 兼松 宣武 教授

6. 朝日大学歯学部附属病院の歯科救急外来の現状

○森 靖博・笠井 唯克・岩島 広明・藤本 雅子
江原 雄一・桑島広太郎・水谷 豪・池田 昌弘
安田 順一・田邊俊一郎・広瀬 尚志・住友伸一郎
玄 景華・兼松 宣武

(朝日大学歯学部口腔病態医療学講座
口腔外科学分野)

われわれ朝日大学歯学部附属病院では平成13年10月1日より歯科救急外来を開設して以来、夜間および休日に時間外歯科診療を希望する患者を24時間体制で受け入れている。当院の歯科救急外来の診療時間は平日16時30分から翌日9時まで、土曜日は12時30分から翌日9時まで、日曜および祝日は9時から翌日9時までの時間帯で歯科診療に当たっている。

診療スタッフは口腔外科の当直医1名と一般歯科の日直医1名の2人で診療にあたり、このうち日直医は0時までの勤務となっており、0時以降は当直医1名となる。

今回、われわれは朝日大学歯学部附属病院の歯科救急外来における患者受診状況について調査し以下のような結果を得たので報告する。

調査期間は平成13年10月1日より平成16年12月31日までの3年3か月間である。

1. 調査期間中の受診患者総数は4,729人であり、一日あたりの受診患者人数は平均3.98人であった。
2. 年度別の受診患者数では平成13年度は調査期間が3か月間と短い事もあり345人となったが、それ以降平成14年度が1,384人、平成15年度が1,491人、平成16年度が1,509人とわずかながら増加傾向を認めた。
3. 性差別の受診患者数は男性が2,691人(56.9%)、女性が2,038人(43.1%)とやや男性が多かった。
4. 受診時間帯別の受診患者数では、平日は21時台302人(14.9%)、土曜日は13時台(11.7%)、日曜および祝日は9時台(19.7%)がそれぞれ最も多かった。また各日0時以降の受診患者人数は減少傾向を認めた。
5. 年代別の受診患者数では20歳代が1,230人(26.0%)と最も多く、次いで30歳代が857人(18.1%)、10歳未満589人(12.5%)と順に多い結果となり、比較的若い年代の受診が多かった。

6. 曜日別の受診患者数では日曜日が1,214人(26.7%)と最も多く、次いで土曜日が880人(18.6%)と多く、いずれも週末に集中する傾向が見られた。

7. 疾患別の受診患者数では次の順に受診人数が多かった。

歯周組織疾患1,192人(根尖性歯周炎967人, P急発225人) う蝕・歯髄疾患1,032人(歯髄炎742人, う蝕290人) 炎症587人(智歯周囲炎320人, 膿瘍170人, 骨髄炎49人, 上顎洞炎36人, 歯肉炎12人) 外傷534人(歯牙脱臼195人, 軟組織損傷169人, 歯牙破折104人, 骨折52人, 打撲14人) 補綴物脱離482人 抜歯後疼痛・出血・感染451人(疼痛が212人, 出血が187人, 感染が52人) 矯正装置脱離96人 義歯破折87人 顎関節疾患68人(顎関節症41人, 顎関節脱臼27人) インレー脱離64人 粘膜疾患25人(潰瘍13人, アフタ5人, びらん4人・カンジダ症3人) 口腔内出血23人 異物18人 神経性疾患13人(三叉神経痛10人, 顔面神経痛3人) ウイルス性疾患8人(帯状疱疹6人, ヘルペス2人) 薬疹6人 その他43人である。

座長 兼松 宣武 教授

7. 口腔領域感染症の原因菌とその抗菌薬感受性

○岩島 広明・田中 四郎・毛利 謙三・桑島広太郎
笠井 唯克・江原 雄一・森 靖博・藤本 雅子
広瀬 尚志・兼松 宣武

(朝日大学歯学部口腔病態医療学講座

口腔外科学分野)

1998年4月から2001年3月までに朝日大学歯学部口腔病態医療学講座口腔外科学分野(歯科外科学)を受診した9歳から82歳の患者113人において顎口腔領域感染症の閉鎖膿瘍から分離された細菌とその抗菌薬感受性について検討した。

今回用いた抗菌薬は17種類で、ペニシリン系抗菌薬としてベンジルペニシリン(PCG), アンピシリン(ABPC), ピペラシリン(PIPC), セフェム系抗菌薬としてセファロリジン(CER), セファクロル(CCL), セフメタゾール(CMZ), セフジトレンピポキシル(CDTR-PI), セフトラジシム(CAZ), セフテラムピポキシル(CFTM-PI), フロモキシム(FMOX), カルバペネム系抗菌薬としてイミペネム(IPM/CS), マクロライド系抗菌薬としてクラリスロマイシン(CAM), リンコマイシン系抗菌薬としてリンコマイシン(LCM), テトラサイクリン系抗菌薬としてミノサイクリン(MINO), アミノグリコシド系抗菌薬としてトブラマシム(TOB), ホスホマイシン系抗菌薬としてホスホマイシン(FOM), ニューキノロン系抗菌薬としてオフロキサシン(OFLX)を用いた。

113症例中、培養陽性症例が53症例(46.9%)であり、総計74菌株が検出された。その内訳は、好気性菌では、グラム陽性球菌である α -streptococciが最も多く14菌株(18.9%)で、グラム陰性桿菌のHaemophilus parainfluenzaeが4菌株(5.4%), グラム陰性球菌のNeisseria属菌3菌株(4.1%)がみられ、その他抗菌薬感受性の低い菌が3菌株であった。

嫌気性菌では、グラム陽性球菌であるPeptostreptococcus属菌が26菌株(35.1%)と最も多く、ついで非黒色素産生性グラム陰性桿菌13菌株(17.6%)や黒色素産生性グラム陰性桿菌4菌株(5.4%)が検出された。

好気性菌に対する抗菌薬の感受性は、IPM/CSはすべての菌株に対して抗菌性を示した。また、OFLXは93.3%, PCG以外の β ラクタム系抗菌薬およびMINOでは83.3~93.3%の高い抗菌性を示している。しかしながらPCG, TOB, CAM, LCMなどの抗菌薬は66.7~76.7%と低く、FOMでは46.7%と低い値を示した。

嫌気性菌に対する抗菌薬の感受性は、PIPC, FMOX, IPM/CSおよびOFLXは95.5~100%の高い抗菌性を示し、ついでCMZ, LCM, およびMINOは93.2%と高い抗菌性を示した。ABPC, CDTR-PI, CFTM-PI, CAMの抗菌性は、77.3~86.4%であった。しかしながら、CAZは72.7%, PCG, CERおよびCCLは68.2%, FOMは50.0%と低い抗菌性を示し、TOBでは全く効果はみられなかった。

今回、口腔領域感染症患者から分離された細菌74菌株に対して、最も高い抗菌性を示した抗菌薬は、IPM/CSであった。また、PIPC, CMZ, FMOXおよびOFLXは90.5~94.6%と高い抗菌性を示した。なお、ABPC, CDTR-PI, CFTM-PI, CAM, LCM, MINOは82.4~89.2%の抗菌性であった。しかしながら、PCG, CER, CCL, CAMの抗菌性は71.6~79.7%と低く、TOBでは31.1%と非常に低い抗菌性を示した。

8. 音波歯ブラシによるプラーク除去効果

○鈴木 昌彦・初山 正敬・小島 寛・北後 光信
白木 雅文・渋谷 俊昭・岩山 幸雄

(朝日大学歯学部口腔感染医療学講座

歯周病学分野)

目的

最近、プラークコントロールに対する意識が高まり、それに伴って電動歯ブラシの興味も高まっている。その理由として電動歯ブラシは短時間で容易にブラッシングができ、プラーク除去効果が高いと考えられる。特にブラッシング時間はプラーク除去効果に影響を与える大きな要因と考えられる。そこで本研究は音波歯